特定非営利活動法人
そだちの樹

ニュースレター

Number 3

Published on Mar. 25, 2013

特定非営利活動法人そだちの樹
〒810-0041
福岡市中央区赤坂１丁目１６番１３号
上ノ橋ビル７階
TEL ： 050-3045-2769
FAX ： 050-3062-3767
URL ： http://sodachinoki.org/

シンポジウムのご報告

皆様の温かいご支援，ご協力のおかげで「そだちの樹」も設立１周年を迎えました。

昨年２月に最初の子どもが入所し，今日までに延べ１０人の子どもたちがシェルター「ここ」を利用し，巣立って行きました。また，「ここ」の入所に至らずとも，必要な子には「コタン（＝子ども担当弁護士）」を選任し，子どもの自立支援を行っているケースも複数あります。虐待その他の理由から，自宅で暮らせない子どもたち，それぞれが様々な課題を抱えながら，「そだちの樹」としてどういう支援ができるのか，手探りの中で今日まで走ってきました。

その１周年を記念し，去る１月２７日にシンポジウムを開催しました。１００名近くの方々にご参加頂き，困難を抱えた子どもの支援について，参加者の皆様と意見交換を行い大変有意義なひとときを過ごすことができました。この日，基調講演を行って頂いたのが島田妙子さん。以下では，その講演内容を，島田さんが書かれた書籍『e love smile ～いい愛の笑顔を～ memory １ 』の内容も取り入れながら，ご紹介させていただきます。

島田さんは３人兄妹の末っ子。２人の兄がいて特に次兄ととても仲が良かった。

５歳の時に両親が離婚し，島田さんら兄妹は父親の下で養育されることになる。父子４人で生活していた時は，優しい父親のもと，不自由ながらも楽しい日々を過ごしていた。クリスマスの日ではなかったが，その数日後には，日にち遅れのサンタさんもやってきた。ところが，自宅から出火した火事をきっかけに，普段仕事で家にいない父親の元で幼い３兄妹だけで過ごすことは危険ではないかということから，児童相談所で保護され，その後，養護施設に預けられる。別れるとき，父親も悲しみから嗚咽し男泣きしていた。

小学校１年生の終わりに，再婚した父親が３人の兄妹を引き取りに来る。そして，新しくお母さんとして紹介された女性は，３人の兄妹に対してとても優しく接してくれていた。それが‥‥。

継母が父親との間の子どもを妊娠すると間もなく，継母の態度は一変した。継母は自分の思いどおりに子ども達を動かそうとし始め，少しでも思うどおりに行動しないと，靴ベラを使って思いっきり叩くことを繰り返すようになった。島田さんは，小学校２年生でありながら，妊娠している継母に代わって買い物，洗濯，食器洗い，食事の準備の手伝いをさせられていたが，その内容が少しでも継母に気に入らないことがあれば，暴力を振るわれた。継母に言わせたら「しつけ」。毎日激しい暴力が続くが，兄妹は，当初，継母からは父親には口止めされていたので，父親は気付かず助けてくれない。子どもが産まれてからしばらくは収まったが，再開した時には，以前にもましてひどい虐待が始まった。直接的な暴力の他に，夜中，寝かせずに正座をさせる等‥‥。

そのうち，父親も継母の虐待に気づくが，実母に代わって養育をしてもらっているという気兼ねがあり，また，暴力は子どもたちに問題があるからだと自己正当化する継母に対して，虐待を止めさせることができなかった。そして，本当の悲劇が訪れる。ある時，継母から兄妹のことで責めら（↗）

（↘）れ続ける中で，父親に“スイッチ”が入る。父親は，突如，そこにいた３人の兄妹のそれぞれに対し，髪を引っ張って引きずり回す，殴る蹴る，靴べらで体中を叩く，服はビリビリに破け，３人とも茫然自失。この日から，父親の激しい虐待が始まった。

この時以後の父親の様子について，島田さんは，人相がどんどん変わっていく，見た目にもわかるほど人相が鬼の形相に変わっていったと語る。

それでも，島田さんは，“いつか優しい父ちゃんに戻る”，“優しかった顔がみたい”，そう思いながら，毎日続く暴力にひたすら耐えていた。島田さんが現在行なっている養護施設における講演活動で接する子どもたちも皆，酷い虐待を受けていながら，親を庇う発言をする，どんなに酷い親に対しても，きっと親は会いに来てくれる，そう言いながら，日々の生活をもの凄く頑張っている，そんな印象を受けているという話をされた。

島田さんは，父親からの虐待で２度死にかけた。その１つが，島田さんがお風呂に入っているところに，突然，父親がやってきて島田さんの髪の毛を掴んで湯船の中に沈めた時。父親は，それを何回も繰り返した後，両手で首と頭をお湯の中に沈めた。意識が遠のく島田さんの頭に過ったのは「これで，お父ちゃんはもう虐待をしなくていいんや‥‥」。島田さんは，自分が死ぬというより，自分の死によって虐待が無くなる。これで父親を助けることができる。そう思ったと言う。島田さんの頭の中には，優しかった父親の記憶がずっとあった。だから，継母が来てから変ってしまった父親は，何かに取りつかれているだけで，本当は優しい，大好きなお父さん。

一方で，既でのところで命拾いした島田さん。その時，父親が継母に向かって語った言葉「これで気が済んだやろ」。島田さんは，その言葉を聞いて，“父ちゃん，誰にビビってんねん。”　と思った。一方で，“父親は，自分たちのことが大好きなんだ”，“でも，継母の手前，仕方なくやっているんだ”，そう思ったと言いう。虐待を受け，まさに殺されかかった小学生の子どもが感じたこと。

島田さんが中学２年生の時に担任を受け持った先生が島田家の虐待に気づき，両親を学校に呼び出す。暴力について言い訳する父親と継母に対して「人としてアカンものはアカンねん」と言い切り，このまま兄妹を家に返せば，酷い虐待があると察知し，その日のうちに兄妹を保護，養護施設に入所させた。この日を境に島田家の虐待は終わった。この時のことを，島田さんは，虐待という真っ暗なトンネルを通っている時に突然，上から引っ張りだされたという感じだったと語る。島田さんは，この時，担任の先生に出会って，初めて大人が信じられると思ったという。

養護施設に行ってから，島田さんは，普通にご飯が食べられること，普通に弁当を持って，普通に学校に行けること，そして，友達と自由に遊べること（虐待を受けているときは，これさえ出来なかった），このことにこの上ない幸せを感じた。それでも，“私が助かっただけでない。父も暴力しなくて良くなったから救われた”と思ったという。

中学３年生のクリスマスの１週間ほど前，父親から電話があった。「悪かった。許してもらおうとか，そんなんで電話したんと違う。ただ謝りたかった」１週間後，父親は自殺未遂。その後遺症で１年後に亡くなった。

島田さんは，虐待する親に自分の話を聞いてほしいと訴えています。虐待をした後，悪いことをしたと思い，反省する。謝ることができる心の状態。その段階であれば，まだ虐待から抜け出せる。この段階で，支援の手をいれる必要性を訴えています。

また，人に対する絶対的な信頼。島田さん自身は，中学２年生の担任の先生に救われた。そして，中学校卒業後に就職した先で，自分のことを褒めてくれる多くの方々との出会いがあり，虐待を過去のものと受け止めることができた。どんな人でも悪い人はいない。そのことを信じ，他人にも伝えることを，これからも続けたいと結ばれました。

この講演を聞きながら，シェルターが何をできるかと考えた時，島田さんが述べていた「普通にご飯が食べられること，普通に弁当を持って，普通に学校に行けること」＝普通の家庭を提供する役割，そして，否定され続けてきた子どもの可能性を信じ，その人の力を引き出す関わりをする役割を果たしていくことであると考えた次第です。

２年目に入る『そだちの樹』のご支援を引き続きよろしくお願いします。

（理事長　橋山吉統）

パネルディスカッションを通じて感じたこと

今回のパネルディスカッションは，虐待を受けた子どもの抱える問題について理解を深めた上で，子ども支援のあり方を議論するというものでした。

パネリストとして，過去に虐待を受けた経験をお持ちの島田妙子さん，福岡市児童相談所（えがお館）所長の藤林武史さん，ＮＰＯ法人北九州ホームレス支援機構事業本部本部長の山田耕司さん，そして，子どもシェルターの子ども担当弁護士（コタン）として，私，髙井が登壇しましたので，以下，ご報告します。

1　被虐待児の抱える問題と支援の難しさ

虐待を受けた子どもは，生きづらさにつながる様々な問題を抱えていると言われています。

この点，今回のパネルディスカッションでは，えがお館の藤林所長から，『他人との距離が上手くとれない』，『他人に頼ることが出来ない』といった対人関係の問題や，『精神的に不安定になりやすい』等のメンタルの問題等を具体的に説明していただきましたが，私のコタン経験を振り返ると，確かに思い当たる点がありました。

対人関係に関していえば，例えば，私自身，突然遠くなったり近くなったりする子どもとの距離感に面喰らうことが何度かありましたし，子どもが支援者に対して強い不信感を示すこともありました。また，上手くストレスを処理できず，物を壊したり，暴力を振るったり，睡眠導入剤を過剰に摂取したりといったことがありましたので，メンタルの問題も抱えていたように思います。

そういった意味では，藤林所長のお話は，実感として「なるほど！」と思えるものでしたし，被虐待児の抱える問題の根深さを改めて感じさせるものでした。

そして，そういった問題こそが虐待を受けた子どもの自立を妨げる大きな要因になっているのです。

2　被虐待児の抱える問題を踏まえた子ども支援のあり方とは？

これが今回のパネルディスカッションの大きなテーマでした。そして，この問いに対するひとつの答えが，山田さんにご説明いただいたホームレス支援機構の取組みだと思います。

ホームレス支援機構では，社会で孤立した被支援者を自立させるためには「多面的で継続的な支援」が不可欠であるという思いから，被支援者に必要なものを，関係機関等と連携しながらコーディネートしていくという発想（山田さんは「伴走的コーディネート」と表現されていました）で活動されているそうです。

私はそうした発想は，虐待を受けた子どもの支援においても必要な発想だと思います。

というのも，前述のように被虐待児の抱える問題はとても根深く，それを一つの機関が限られた時間の中で解決することは不可能だからです。

この点，藤林所長も，行政だけでなくＮＰＯ等も一体となった子どもの支援が必要だとおっしゃっていましたし，島田さんも関係機関が連携することに大きな期待を寄せられていました。

私は，パネリストの皆さんのお話をうかがって，子どもシェルターとしても，子どもシェルターが用意できるメニューだけで子どもを支援しようとするのではなく，関係機関と連携して協力し合いながら，子どもに必要なメニューをコーディネートしていくという発想を持つことが必要だと感じました。

3　最後に

今回のシンポジウムを通じて，子ども支援に関わっている各機関や団体が具体的にどういった活動をされているのか，私自身もっと知りたいと思いましたし，できればそこで子どもの支援に関わっている「人」同士のつながりを作っていきたいと感じました。

そうしたつながりの中で，シェルターに来る子どもが，自分のためにたくさんの大人が支援してくれていることを知り，『人から受け容れられている』とか，『支えられている』という感覚を持ってくれれば，対人関係の問題やメンタルの問題も，少しずつ克服できていくのかもしれません。

私は，コタンの役割は，子どもをひとりぼっちにしないことだと思っています。

子どもをひとりぼっちにしないために，これからは子どもの伴走者として，関係各機関と連携しながら支援に取り組んでいきたいと思います。

（コタン　髙井弘達）

そだちの樹の応援団：アルバス写真ラボさん

第２号でご紹介した加布里のカフェ「踵屋敷」に続いて，今号でも，そだちの樹を応援してくださっている方をご紹介します。

アルバス写真ラボさんは，ご飯も食べれる「まちの写真屋」。筑紫女学園のそばに建つ可愛らしい一軒家で，「トレネ」というバルと一緒に営まれています。

玄関を入ると，オーナーの酒井咲帆さんをはじめ，スタッフのみなさんが笑顔で出迎えてくれます。建物２階にあるギャラリー兼スタジオでは，そだちの樹の運営委員が宣材写真を撮っていただいて，えらく気に入っているとか。

２階では，撮影や展示会のほかに，不定期で写真やまちづくりについて学べるスクールが開催されています。まちづくりの視点で社会の様々な課題をとりあげる「まちづくりスクール」では，料金が「１０００円以上」に設定されていて，「以上」の部分をそだちの樹に寄付していただいています。講師を務める田北雅裕さん（九州大学専任講師，アルバス写真ラボディレクター）は，さまざまな切り口で教育や福祉の問題を分析されていて，いつも新しい知的刺激を提供してくれます。

酒井さん，田北さん，アルバス写真ラボスタッフのみなさま，まちづくりスクールにご参加のみなさま，いつもご支援，ご協力をいただきまして，ありがとうございます！

（運営委員　安孫子健輔）

［ アルバス写真ラボ ］

福岡市中央区警固2-9-14
TEL ： 092-791-9335
WEB ： http://albus.in

ご支援のお願い

そだちの樹では，子どもたちの支援を充実させるため，また年間１５００万円を超える「ここ」の運営費をまかなうため，随時，ボランティアや会員登録，寄付などのご支援をお願いしています。

ご支援をいただいたみなさまには，ニュースレターなどを通じて，活動報告やご参加いただけるイベントの情報等をお知らせしています。

ご支援のお申出，お問合せの方法は，そだちの樹のウェブサイト（http://sodachinoki.org/）やパンフレットにてご確認ください。

そだちの樹ウェブサイト ▶

編集後記

「ここ」が開設して１年が経ちました。

この１年を振り返ってみると，子どもたちを支えるというよりは，厳しい環境を生き抜いてきた子どもたちが何を感じ，何を求めているのかを探り続けた１年だったように感じます。「ここ」を開設したことがきっかけとなって，たくさんの子どもたちと出会い，同じ志を持って活動する仲間と出会い，「応援してるよ」という温かい声に出会う。開設当初は思いもよらなかった出来事の連続でした。

「ここ」はいま，山のような課題を抱えています。でもその中には，子どもの目線で活動する経験がなければ見えてこなかった課題もあります。この感覚を大切にしつつ，次のステップ，「子どもたちをどう支えるか」を形にしていきたいと思います。

（編集委員　あびこ）